

「立憲デモクラシーの危機から、政権交代へ」

◇政府の規律の問題

- ・森友、加計問題は、家財国家 (国家の私物化) になろうという現れ。
- ・いいかえれば、法の支配から人の支配への逆行。
- ・権力者と役人との関係が法に基づく指揮命令関係ではなく、身分的な支配服従的、いいかえれば主人と奴隷の関係になろうとしている。親分が「カラスは白い」と言えば、役人も「カラスは白い」と言い出す。あったものを「ないと言え」といわれれば、役人は「ありませんでした」「資料を捨てました」「記憶にない」ということを平気で言うようになった。
- ・前川事務官は、奴隷的役人ではなく、法に基づく役人であるとの誇りを何とか発揮したということだ。

◇政府と国民との関係

- ・法の支配がなくなっていることから、権力の濫用がどんどん進んできた。これが共謀罪問題の本質。罪刑法定主義を崩壊させる。極めてあいまいな文言を警察権力が恣意的に解釈して、私たちの市民的な活動に対して抑圧が及んでくる危険性がある。
- ・安倍首相は、スペインのオルテガがいうところの《甘やかされた坊ちゃん》 (自分はしたい放題のことをするために生まれ落ちた人間という自覚) である。その甘やかされた坊ちゃんである安倍首相のオモチャが「憲法改悪」。
- ・こういう政治権力の濫用に対して、三権分立、チェックエンドバランスが働いていない。議院内閣制の限界 (アメリカのような三権分立との違い)

◇国民による是正、都議選の評価

- ・そうすると、政治を濫用する権力者に対しては、国民が選挙でレッドカードを突き付ける以外に是正の方法はない。だからこそ、次の選挙が重要になる。
- ・都議会選挙は、安倍的政治手法への不信感の充満を示した。都民ファーストという選択肢らしきものが現れた。既存の野党は、残念ながら、安倍政治に対する他の選択肢として認知されていない。
- ・安倍政治の「崩壊の始まり」は、「より悪い政権の始まり」という危険もあり得る。都民ファーストからできてきた「日本ファースト」は、ヨーロッパにおける排外主義的な右翼政党と似ている。こんなところと連携するというのは、民進党として絶対やってはいけない。

◇次の選挙に対する戦略の構築

- ・マスコミが「都民ファースト」を持ち上げて報道し、国民の「支持」を集める中で、本来の立憲野党が存在感を示すためにはどうするか、ということが次の大きな課題。
- ・前の参議院選挙とは違う構えをつくらなければならない。あの時は、改憲阻止、3分の2を許さない、ということが課題で、それに向けて野党共闘を追求した。
- ・安倍政権の悪政を直すためには、こちらが多数派を取らなければならない。3分の1から2分の1に目標を上げなければならない。そのために野党と市民の結集を進めていかなければならない。

◇地方選挙

- ・市民と野党との協力の点検は、地方選挙にある。
- ・新潟知事選は、非常に大きな教訓を含んでいる。勝利の方程式が見えてくる。ひとつは争点の明確化 (原発再稼働の阻止)、ふたつ目は候補者の一本化、そして、関心が高まり無党派層も取り込めたということ。民進党 (自由投票とした) や連合の動員力が低いということも明らかになった。この勝利

の方程式（パターン）をどうやって、次の国政選挙に生かしていくか。

- そのときに、非常にやっかいな問題が連合のあり方。「いつまでも民進党に付き合っておれるかい、政権党と直に交渉して利をえたほうがいい」という動きさえ感じさせる。その本音はよく分かる。私自身も、正直言って「いつまでもやっておれないよ」と言いたくなる。しかし、それを言っただけでは、日本の民主主義は終わりになる。野党なき政治体制。そういう政治状況をつくっていいのか。政権交代が可能な、二極的な政党システムを求め続けなければならない。

◇日本政治の進むべきいくつかのシナリオ

- 地方選挙を見ていると、日本の政治を決めていく、いくつかのシナリオが見えてくる。一つは日本型コーポラティズム。労使談合でものごとを決めてしまう。労働組合を基盤とした政党も事実上権力に吸い寄せられてしまう。対抗勢力である力を失ってしまう。これが7月の横浜市長選挙に現れた。現職候補者を地元の連合が応援し、民進党の多くの議員も応援した。そのため、現職に批判のある市民層が力を発揮できずに終わった。
- それに対して、成功例として、先に述べた新潟知事選挙、それから後でお話のある仙台地方選挙。既成政党に市民、労働組合がうまく連携をし、候補者を一本化して勝つ。こういう勝利の経験もある。私たちは悲観する必要はない。

◇民進党の問題

- 前原氏は大丈夫か、信頼できるのかとよく聞かれる。
- 私は前原さんの友達ではないが、全体状況を考えれば、民進党を突き放して、あいつらだめだと言ってしまっただけでは、野党結集はできない。私は「いや、前原という人は、慶応の井出君の薫陶を受けて、内政的にはすっかり社民主義者になっているし、安倍さんの憲法論議には乗らないと言っているから、もうしばらく見守っていきましょうよ」などと、何か前原の代弁者のようなことを言っている（笑い）
- ただ、前原氏は、代表者になってから発言が若干変わって、「維新と組みたい」とか「憲法論議も一緒にやっけていく」など色々なことを言い出したので、「それはちょっとまずいよ」という感じ。
- 枝野氏との代表選の論戦の中で、二人の対立点よりも、民進党の依って立つ土台が見えてきた、そのことを評価したいと思っていた。つまり、「立憲主義を破壊する安倍政治の憲法改正にはのらない」、それから「国民的な税負担率を上げる中での、社会の再建を果たす」。これらの土台で次の政権を考えていこう、ということであった。
- 民進党の中にも、野党共闘を大事にすべきだという人たちがまだまだいる。私たち市民が掲げてきた理念、立憲主義、個人の尊厳を否定するような動きがあれば、これは全面的に厳しく批判をしていく。「ふざけるな、それではお前ら、自民党の別動隊になりたいのか」ということも必要。

◇これからの闘い

- 他方で、この2年間、野党と市民で闘ってきた経験もあるのだから、やっぱり、安倍政治を終わらすという大きな目標に向けて、みんなで協力をしていこう、特に大事なものは、皆さんのような地域レベルで動いておられる方々が、具体的な地域レベルの闘いの中で、協力関係を構築していくことが大事。全国一律に、こういう形でいこうという方針を上から下ろしていくのは無理がある。うまくいっている地域がどんどん走って行って、「この地域では、野党と市民が協力して、勝てるぞ」という構図をどんどん作っていく、そういう方がいい。
- もう一つ、政権交代が問題になるとき、政権側からは、野党に対して「野合」批判は必ず出てくる。それに対して、私たちは、「今必要なことは、網羅的体系的な政権構想をつくることではない。われわれのめざす政権交代は、時限付きの交代である。究極的には目標の違った人たちが、今の安倍政権の有害な政策をどんどんリセットしていく、そういう点で結集すればいいわけです。
- 多くの県ですでにやられているように、穏健保守からリベラル革新勢力の大結集を図っていく、究極の日本よりも5年先の日本を立て直す、という政策を共有していく。その中で、原発とか社会福祉、

外交によるアジアの平和、個人の多様性を確保していく、こういった自民党側が絶対にまねできない政策を打ち立てていく、ということです。

◇政権構想について

- ・「野合」と言われたら、私たちは、歴史修正主義、権威主義、戦前回帰みたいな勢力を包含している今の自民党よりも、はるかにグローバルスタンダードに近い民主主義の連合体であると反論しなければならない。
- ・消費税もゼロという人もいるかもしれないが、現状凍結で、政府のお金を出させて国民の生活を支えていくということで、みんなが合意していく、ということ。
- ・たとえば言えば、福岡へ行きたい、広島へ行きたい、大阪にいきたい、と行先はそれぞれ違うが、方角は同じ、その場合に、とりあえず、京都あたりまでは新幹線で一緒にいこう、と、そういう形の政権交代ではないか。
- ・次の政権交代の時期は、2020年のオリンピックの前後、日本の経済の矛盾が噴き出してきて、希望にあふれた政権交代ではなく、安倍政権がやり散らかした色々な負の遺産をどうやって再建するか、いわば原発の廃炉みたいなものに（笑い）、色々な分野で対処していかなければならない、私たちは、そういう覚悟を持って政治に取り組んでいかなければならない。
- ・自民党政権の中で、野田聖子さんとか岸田さんというような、良識を持っているかに見える方がトップに来る、そういうことを歓迎するムードとなることは大いにあり得る。しかし、安倍的な改憲志向というのは、今の自民党の中に埋め込まれている、支持基盤という関係でも、そういう路線は決してなくなることはないだろう、と私は思います。
- ・最後ですが、政治というのは希望を追求する作業。魯迅がいうように、「希望とは地上の道のようなものである。（中略）もともと地上に道はない、歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」
- ・みなさんと一緒に、もう少し歩み続けたい。

(2017/9/11 記)